



Title	『ハムレット』
Author(s)	羽根田, 俊治
Citation	明治大学教養論集, 60: 42-69
URL	http://hdl.handle.net/10291/8952
Rights	
Issue Date	1970-12-01
Text version	publisher
Type	Departmental Bulletin Paper
DOI	

<https://m-repo.lib.meiji.ac.jp/>

『ハムレット』

羽根田 俊 治

〔I〕

第17世紀の最初の10年間は大体シェイクスピアの悲劇の時代と考えられ、*Hamlet* (1600—1)、*Othello* (1604—5)、*King Lear*、*Macbeth* (1605—6)、*Timon of Athens* (1607—8)、*Antony and Cleopatra* (1606—7)、*Coriolanus* (1607—8)〔作品の執筆年代は E. K. Chambers の推定による〕などの大作が つぎつぎに書かれた時代であった。とくに後期の悲劇の多くは人間を中心に自然が錯乱し、自然が病むといった相貌を呈している。ここでいう自然とは、ハムレットがエルシノアの宮廷を訪れた旅廻りの役者たちに向かって、芝居の目的を説き、それは今も昔も「いわば、自然に鏡をかかげること」‘to hold up, as it were, the mirror up to nature’ といった「自然」であり、シェイクスピアの作品——とくにその悲劇の中において、「自然」とは一体いかなるものかという観念的な捉え方を通して現れる自然の姿であるが、これはシェイクスピア以前、およびその時代に一般に信じられていた Ptolemy の天文学に基いて精緻に組立てられた宇宙観（自然観）に裏打ちされたひとつの権威的な概念であった。その宇宙観によれば、全宇宙は神を絶頂として、天使、人間、獣類、植物、鉱物という五大範疇が順次下降的に配列され、全体が神に包摂されるひとつの秩序体系をなして存在するものである。「自然」が諸物の単なる雑居では

なくて、全体が神中心の整然たる階層秩序を保つ構造物、すなわち ‘cosmos’ であるという考えは、西洋の古代中世における自然観——秩序観のもっとも根幹的な性格をなすものであった。この中世的自然法思想にもとづく自然——宇宙の秩序についての概念がもっとも詳細明確に述べられているのは、*Troilus and Cressida* (1601—2) のなかのあまりにも有名なギリシアの将軍ユリシーズの ‘order’ speech である。*Troilus and Cressida* は、その題材をトロイ戦争に取っている作品である。ギリシア軍の7年にわたる攻囲に耐えて、トロイはなかなか落城しない。焦燥をしめすギリシア軍の作戦会議で、ユリシーズは、トロイが落城しないのは、トロイが堅固なのではなくて、ギリシアの主権、権威がおこなわれなくなって、命令と服従の規律が乱れているところにある。そしてユリシーズは自然の秩序とその正常な機能の回復を強く求める。

The heavens themselves, the planets, and this centre
Observe degree, priority, and place,
Insisture, course, proportion, season, form,
Office, and custom, in all line of order :
And therefore is the glorious planet Sol
In noble eminence enthron'd and spher'd
Amidst the other ; whose med'cinable eye
Corrects the ill aspects of planets evil,
And posts, like the commandment of a king,
Sans check, too good and bad : but when the planets
In evil mixture to disorder wander,
What plagues, and what portents, what mutiny,
What raging of the sea, shaking of earth,
Commotion in the winds, frights, changes, horrors,
Divert and crack, rend and deracinate
The unity and married calm of states

Quite from their fixture! O! when degree is shak'd,
What is the ladder to all high designs,
The enterprise is sick. How could communities,
Degrees in schools, and brotherhoods in cities,
Peaceful commerce from dividable shores,
The primogenitive and due of birth,
Prerogative of age, crowns, sceptres, laurels,
But by degree, stand in authentic place?
Take but degree away, untune that string,
And, hark! what discord follows; each thing meets
In mere oppugnancy: the bounded waters
Should lift their bosoms higher than the shores,
And make a sop of all this solid globe;
Strength should be lord of imbecility,
And the rude son should strike his father dead:
Force should be right; or rather, right and wrong—
Between whose endless jar justice resides—
Should lose their names, and so should justice too.
Then every thing includes itself in power,
Power into will, will into appetite;
And appetite, a universal wolf,
So doubly seconded with will and power,
Must make perforce a universal prey,
And last eat up himself. Great Agamemnon,
This choas, when degree is suffocate,
Follows the choking.

(I. iii. 85—126)

「あの天界そのもの、もろもろの惑星、そしてこの宇宙の中心たる地球、すべて位階を、席次を、位置を、規律を、進路を、均衡を、時期を、方式を、職務を、慣例を、あらゆる方面において厳しく守っております。それゆえにこそ、光輝燦然たる太陽は、仰ぎ見る天空の高きに他の群星に囲まれて王座につき、その医力をそなえた眼は、凶悪なる遊星の凶相をただし、さながら国王の命令のごとく、妨げを受けることなく、善悪の一切のものに及ぶのであります。しかしそれらの惑星がよこしまに入り混ってさまよい、秩序を乱すということになればどうなることであろう。悪疫がはびこり、異変は乱れ飛び、世は反乱となり、海は荒れ狂い、大地はゆらぎ、風は狂い、驚愕、変化、恐怖を生じて国家の統一と和合の安寧を乱しかつ破り、引き裂きかつ根こそぎにして、まったくその安定を失わしめるでありますよ！ げに、位階紊乱するときはあらゆる高邁なる計画に到達する階梯がゆらぎ、その企画も病みくじけます。社会も、学校の級次も、都市の組合も、遠隔の地よりする平和な交易も、長子権も、生得権も、長上の、また、王冠、王笏、月桂冠の特権も、位階によるのでなければ、どうして正しい位置を保ち得ましょう。もし位階を除き去り、その階和の弦を狂わすならば、何という不協和音を発するでありますよ。万物相会するもただ背反あるのみであります。境を限られた海水は、その胸を岸辺よりも高くもたげ、この堅い大地を一面水浸しにいたします。強者は弱者を傲然として傾使し、無道の子は父親を撃ち殺します。暴力は正義となります。いや、正邪そのものが、その両者の果しない軋轢の間にこそ正義は居を得ているものゆえ、その名を失い、かくして正義もまた消滅し去ります。しかる時は、すべては暴力に、暴力は意志に、意志は食欲に帰してしまい、万人の心に棲む狼である食欲は、こうして意志と暴力との二重の支援を得て、かならずや万物を餌食となさずにはおかず、ついにはおのれみずからをも食いつくすでありますよ。アガムノン陛下、かくのごとき渾沌が、位階窒息する時、その窒息についてあらわれます」

宇宙は全体が神に包摂されるひとつの秩序体系をなして存在するものであり、そしてこのような全宇宙の秩序様式は、全宇宙の秩序体系の中のさまざまな部分において相似的に反覆されるとともに、各部分はおのおの相互のあいだに密接な対応連関を持つものであると考えられ、人倫の原理を自然の秩序の中に認めていることであった。天地が乱れる時人倫もまた乱れ、人倫が乱れる時天地もまた乱れるという考え方であった。これは中世におけるもっとも正統的な自然観あるいは世界観であって、シェイクスピアにおいても普通の考え方であった。*Henry V* のなかにも、キャンタベリー大主教の言葉として、

Therefore doth heaven divide

The state of man in divers functions,

Setting endeavour in continual motion ;

To which is fixed, as an aim or butt,

Obedience :

(I. ii. 183-187)

「それゆえ神は国家の中に種々の職能を分ちつくつて、たえず活動させておられますが、それには一つ目標として、服従ということが定められています」

というのに始って、以下蜜蜂王国の例を引いて蜂のそれぞれの機能がはっきり分れながら、しかも整然たる秩序を保っている事実を挙げ、もしひとつの目的に一致してさえいれば、それぞれ異なった物の働きも、すべて見事に用をなすことは、八方から放たれた矢もひとつの標的に集まるのと同じであるというようなことを言っている。また *Julius Cæsar* のブルータスの言葉にも、この統括的原理を人間ひとりひとりの王国にたとえ、ひとたび理性の命令に身体諸器官が従わないとなれば、

and the state of man,

Like to a little kingdom, suffers then

The nature of an insurrection,

(II. i. 67—69.)

「人間という国は小さな王国のように、内乱のような状態となる」

こうした引例がたくさんあることは、もちろん、そうした世界観が強く信じられていたことでなければならぬ。宇宙にある自然法的秩序が失われた時に出現するであろうとユリシーズが想定する渾沌は、*Troilus and Cressida* のギリシア軍の世界にその徴候をあらわしたものであり、マクベスをその中に誘いこんで彼を滅ぼすことになった世界であり、*King Lear* においてリア王の前に現出した世界であり、ハムレットが投げこまれた暗い悪の世界であった。その暗い影の世界に引きこまれるハムレットの苦悩と陰うつをシェイクスピアは ‘Who’s there?’ という感銘ぶかいせりふで始め、開幕すでに渾沌としてさだかでない霧の世界をみごとに描き出している。

人間界と天地自然とのあいだには密接不分離の照応があり、世界の一角における秩序の紊乱に基因する一般的渾沌は、シーザー暗殺の前にローマに現われた天変地異を想起するホレイショの言葉のなかに反映を見せている。

In the most high and palmy state of Rome,
A little ere the mightiest Julius fell,
The graves stood tenantless and the sheeted dead
Did squeak and gibber in the Roman streets;
As stars with trains of fire and dews of blood,
Disasters in the sun; and the moist star
Upon whose influence Neptune’s empire stands
Was sick almost to doomsday with eclipse;
And even the like precursor of fierce events;

As harbingers preceding still the fates
And prologue to the omen coming on,
Have heaven and earth together demonstrated
Unto our climatures and countryman.

(I. i. 113—125.)

「ローマがもっとも高く勝利に栄えていたころ、権勢ならびなきジュリアスが倒れるすこし前、墓はことごとくもぬけの殻となり、屍衣をまとった亡者が、ローマの街を泣き叫び、わめきまわった。星は火の尾を曳き、血の露を降らせ、太陽に凶相が現われた。ネプチューンの帝国（大海）がその力に左右される湿った星（月）は、蝕のために病み、最後の審判日さながらであった。ちょうどそれと同じように、たけだけしい事件の前兆を、常に宿運に先立つ前触れ、迫り来る凶事の前口上として、天地が一体となってわが国の各地の民に示しあてているのだ」

また父親の亡霊が出たと告げられたハムレットが、

My father's spirit in arms! all is not well;
I doubt some foul play:

(I. ii. 254—255.)

「武装した父君の亡霊だと！ こいつは万事よくない。何か悪だくみがあ
るな」

と言ったのも、まったく同じ意味のものであり、自然法的秩序の崩壊を体験したハムレットは暗澹たる世界観に突き落とされるが、その媒介となったものは彼の母親の所業であった。

〔Ⅱ〕

ハムレットの悲劇はかれが経験しなくてもすむものから始まった。それは、かれの父の亡霊ではなくて、かれの母の二度目の結婚であった。『ハムレット』の第一幕が開く前に、ハムレットの父は殺され、下手人である叔父が王位と母とを奪ってしまっている。ハムレットは叔父が父親を殺した下手人であることは知らないが、叔父が母と結婚していること、しかも父の死後赤く泣きはらした眼が澄まないうちにその結婚がとり行なわれたことに、何とも息苦しいやりきれない気持ちに追いこまれている。シェイクスピアの当時においては、女の再婚は人びとの倫理的感情に今日よりもはるかに強く訴え、法律には許可されていても、唾棄すべき行為、すなわち一種の合法的姦通と考えられていた。ハムレットはこのことを第一幕第二場、第三幕第二場、第五幕第二場と三度繰り返し、亡霊もハムレットに向って二度、母の近親相姦を強調している。またこの戯曲の劇中劇に登場する王妃のせりふに、「ひとたび寡婦となって、ふたたび人妻となるとき、我に呪いあれ！」とか、

A second time I kill my husband dead,
When second husband kisses me in bed.

(III. ii. 187—188.)

「第二の夫に添い寝して接吻を受ける時には死せる夫をふたたび殺す」

というのがある。女の再婚とはそのようなものであった。作品を他に求めれば、シェイクスピアと同じ時代の George Chapman (1559?—1634) の作品 *The Widdowes Teares* 「寡婦の涙」(printed 1634) の第二幕第四場にも、「寡婦の再婚というものは一種の合法的姦通であって、たとえば、高利貸のように法律では許されてはいたが、一般にはいやがられていたので、そういう近親相姦的な生活を真正面から憎んでいる」とあるのがよい例証である。とにかく、

このように当時一般から近親相姦として唾棄されていた母の再婚によって、ハムレットは強い心理的な衝撃をうけている。それ以前のハムレットはオフィーリアの言葉によると、

The courtier's, soldier's, scholar's, eye, tongue, sword ;
The expectancy and rose of the fair state,
The glass of fashion and the mould of form
The observd of all observers,

(III. i 153—157.)

「延臣の、武人の、学者の、眼、舌、剣。うるわしきお国の望み、バラの花、流行の鏡、作法の典型、眼のある人の眼の向うところ」

であったといっている。元来そのようであったハムレットがすっかり人が変わってしまったとオフィーリアは嘆くのである。さらに、これこそ勇猛果断の武将として、ハムレット自からうらやむフォーティンブラスが、ハムレットの死を悼んで述べる幕切れの言葉、

Let four captains
Bear Hamlet, like a soldier, to the stage ;
For he was likely, had he been put on,
To have prov'd most royally : and, for his passage,
The soldiers' music and the rites of war
Speak loudly for him.

(V. ii. 395—400.)

「四人の隊長をして、ハムレット殿を武人として壇上に運ばしめよ。もしその位に置かれたならば、もっとも王者らしき王となられたに違いない方で

あったのだから。そしてその長逝を悼むために、軍樂と弔砲の礼とをもって、高らかにその徳をたたえよ」

これもまた、ハムレットがいかなる人間であったかを、はっきりと要約しているものである。すなわち、ハムレットはすべての点でトレミー的な調和の完全なる具現者であったと言える。それが母の不義を知ってから、彼の意識を占有しているものは母親の再婚の一事で父の死という事実はそれによって蔽いかくされてしまったと言ってよいほどである。ハムレットが友人ホレイシオに、どうして大学から暇をとってエルシノアへ来たのかと訪ねるところがある。

HORATIO. My lord, I came to see your father's funeral.

HAMLET. I pray thee, do not mock me, fellow-student ;

I think it was to see my mother's wedding.

(I. ii. 176—178)

ホレイシオ お父上のご葬儀を拝観にまいりました。

ハムレット 君、お願いだから、からかわないでくれたまえ。母上の結婚式を見に来たのだろう。

貞淑と見えていたハムレットの母親は、実は、情欲の満足のためにはあえて人道を捨てて邪淫の床に急ぐ女であった。人間の理性が情欲の前にもろくも敗れてしまったのである。母親への幻滅は人間への絶望につながり、ハムレットの心は乱れ、一切のことに意味と興味とを見失い、生きることへの意欲さえ喪失してしまう。人間の世界の乱れは、自然の秩序の破壊を呼ぶ。地上には雑草が繁茂する如く動物的本能がはびこり、天空は瘴気に満ちている。

O! That this too too solid flesh would melt,

Thaw and resolve itself into a dew ;

Or that the Everlasting had not fix'd
 His canon 'gainst self-slaughter! O God! O God!
 How weary, stale, flat, and unprofitable
 Seem to me all the uses of this world.
 Fie on 't! O fie! 'tis an unweeded garden,
 That grows to seed; things rank and gross in nature
 Possess it merely. That it should come to this!
 But two months dead: nay, not so much, not two:
 So excellent a king; that was, to this,
 Hyperion to a satyr; so loving to my mother
 That he might not beteem the winds of heaven
 Visit her face too roughly. Heaven and earth!
 Must I remember? why, she would hang on him,
 As if increase of appetite had grown
 By what it fed on; and yet, within a month,
 Let me not think on 't: Frailty, thy name is woman!
 A little month; or ere those shoes were old
 With which she follow'd my poor father's body,
 Like Niobe, all tears; why she, even she,—
 O God! a beast, that wants discourse of reason,
 Would have mourn'd longer,—married with mine uncle,
 My father's brother, but no more like my father
 Than I to Hercules: within a month,
 Ere yet the salt of most unrighteous tears
 Had left the flushing in her galled eyes,
 She married. O! most wicked speed, to post
 With such dexterity to incestuous sheets.
 It is not nor it cannot come to good;

But break, my heart, for I must hold my tongue!

(I. ii. 129—159.)

「ああ、このあまりにもあまりにも固い肉体が、溶けて、くずれて、露になつてしまえばよい！ さもなければ永遠の神が自殺を禁ずる掟を定めてくれないければよかったのに！ おお、神よ、神よ！ この世のいとなみのすべてが、何という退屈な、味気ない、つまらぬ、無益なものに思われることだろう！ ばかばかしい！ 実にばかばかしい！ それは雑草の生え放題、繁り放題にうちまかせた庭だ。いやしく、けがらわしい草どもが一面に生いしげっているのだ。こんなことになろうとは！ 亡くなられてからたったのふた月。いや、そんなにならない、ふた月には。あれほどすぐれ給うた国王。それをこれにくらべれば、日神 (Hyperion) と半獣神 (satyr) ほどの違いだ。あんなに母上を愛しておられた、空吹く風さえ母上の顔にあまりひどく当てはならないとでもいうように。ああ、たまらない！ 思い出せというのか、そら、母上は食べたもので食欲がますます募るかのように、父上に寄りすがっておられたものだ。それなのにひと月もたたないうちに——いや思うまい——もろきものよ、汝の名は女だ！——わずかひと月、ナイオビのように泣き濡れて父上の遺骸を送って行かれた時の靴が古くもならないうちに、——どうだろう、その人が、同じその人が——おお、神よ！ 理性の力を持たぬ獣でももう少しは長く悲しんだであらうに——結婚したのだ、叔父と、父上の弟、とは言ってもわたしとハーキュリーズとの違いほど父上には似ても似つかぬ者と。ひと月もたたぬ間に。世にもよこしまな涙の塩が、赤く泣きはらした目からまだ去らないうちに、結婚したのだ。ああ、何といういやらしい早業、こうも手際よく邪淫の床へ急ぐとは！ よいことではない、よいことになるはずがない。だが、裂けよ、わが心、わたしは口をつぐんでいなければならぬ」

しかも、人間の獣心をハムレットに見せつけたものが、彼の肉親の母親であ

ったところに、ハムレットにとって、その苦悩が、人類にたいして抱いていた彼の高潔な理想主義の幻滅という精神的な苦悩というよりは、むしろ肉体的な苦悩となる理由があった。母親の汚れのゆえに、彼自身もまた汚れたものであると感ずるハムレットの意識である。こうしてハムレットの意識の中で、天と地と人間の全宇宙の混乱の相互反応が成立し、ハムレット自身の主体を喪失させてしまったのである。ロメオとジュリエットを外から動かしていた“stars”は、ハムレットを意識の中から動かしているのである。そしてこのハムレットの意識は罪の意識における根本的変革でももたらされないかぎり、永久に拭い去ることの出来ない意識であり、そのような変革は最後までハムレットにはもたらされない。

亡き父王の亡霊が出現して、叔父のクローディアスと母親との不義、謀叛の真相を知らせるのは、ハムレットがこのように自己の主体性をうしない茫然自失していた時においてである。何も為し得なくなっている彼に、為し得る一つのことを与えられる。父親の復讐は、ハムレットにとって新しい負荷となるものではなく、それはむしろ、ハムレットにとっては、追いつめられた境地からとにかく飛び出すことのできる一つの目標となる。第一幕第五場、父王の亡霊が、ことの始終を話してハムレットに復讐を命じたとき、亡霊は 50 行にわたる言葉を一気に話すあいだ、ハムレットは一言も言わない。ハムレットが我に帰って言葉を発するのは、亡霊がすでに消え去ってしまった後のことである。

O all you host of heaven! O earth! What else?

And shall I couple hell? O fie! Hold, hold, my heart!

And you, my sinews, grow not instant old,

But bear me stiffly up! Remember thee!

Ay, thou poor ghost, while memory holds a seat

In this distracted globe. Remember thee!

Yea, from the table of my memory

I'll wipe away all trivial fond records,

All saws of books, all forms, all pressures past,
That youth and observation copied there;
And thy commandment all alone shall live
Within the book and volume of my brain,
Unmix'd with baser matter: yes, by heaven
O most pernicious woman!
O villain, villain, smiling, damned villain!
My tables,—meet it is I set it down,
That one may smile, and smile, and be a villain;
At least I'm sure it may be so in Denmark:
So, uncle, there you are. Now to my word;
It is, 'Adieu, Adieu! remember me.'
I have sworn 't.

(I. v. 92—112.)

「おお、天なる神々よ！ おお、大地よ、それから何だ？ いっそ地獄も付け加えようか？ ばかな！ しっかりしろ、心よ！ それに五体の筋肉よ、急においぼれないで、しっかりとこの身体を支えてくれ。『わしを忘れるな！』 そうだ、あわれな亡霊よ、このちぎに乱れた頭の中に記憶が存在するかぎり。『わしを忘れるな！』 そうだ、この頭の中にある記憶の帳面から、つまらぬばかばかしい記録はみんな消してしまおう。子供のときから、またいろいろと見ておぼえたすべての格言、もののすがた、過去の印象などすべて。そしてこの頭脳という本の中には、つまらぬがらくとは一しょにしないで、あなたの命令だけを生かしておくことにしよう。 そうだ、天に誓って！ おお、何たる邪悪無道の女だ！ おお、悪者、悪者、顔には微笑を浮べる極悪非道の悪者！ メモだ、しっかりと書きしるしておいた方がよい。人は満面に笑いを浮べて、しかも大悪人になれるんだと。少なくともデノンマークではたしかにそうなのだ。これでよし、叔父上この通りだ。さて、

これからの格言は、『さらば、さらば、わしを忘れるな』だ。ここにそれを誓う』

〔Ⅲ〕

庭で午睡を楽しんでいた父親の耳の孔に叔父が毒をたらして殺し、その叔父と自分の母親が結婚することは耐えられないことである。このようなことは人を狂気に追いやることがあっても不思議とは思われないものである。もしそれが事実であるとすれば、そういう現実に対してハムレットは自分の態度を決めかからなければならない。そして、この現実に譲歩することを否定するならば、その現実を直視することに耐えて行かなければならない。ただ、クローディアスをハムレットにとって父親殺害の容疑者にする媒介となったものが、その存在の虚実または真相が明らかではない幽霊というものである。当時の幽霊観は *Dover Wilson* に従えば大きく三つに分別される。幽霊を煉獄 ‘*purgatory*’ からこの世にもどってきた死者の霊と見る旧教的な考え方がその一つである。煉獄は天国および地獄と現世との中間にあるもので、そこからふたたび地上に帰ることは比較的容易であり、現にアイルランドにある湖 *Lough Derg* の島の穴は、煉獄に通じていたと伝えられている。この伝説はアイルランドの守護聖徒である *St. Patrick* の証言にもとづくものとされていた。しかし、煉獄を信じない新教では、そうは考えなかった。すなわち、幽霊と見えるものは、たまには天使が、多くの場合には、悪魔が死者のかたちを取って現われるのであって、それに誘われ身体または精神に大きな害を及ぼされる危険がある。これが第二の見方である。父王の亡霊について行こうとしたハムレットをホレイショと衛兵たちが、しきりに止めようとしたのは、この懸念からであった。そしてこの新教的な考え方は、*Luther* と関係の深い *Wittenberg* の大学に学んだハムレットの見解でもあった。しかし、父王の亡霊はハムレットもホレイショも、それに二人の衛兵も見たことになっており、きわめて現実的なものであったため新教的信仰の持主であったはずのハムレットも、亡霊の言葉を信じ

ないわけにはいかなかったのである。当時の人びとのあいだには、このような新旧両様の信仰が交錯し、かならずしも一方に徹していたのではなかった。第三の幽霊観は一貫した合理的な考え方で、幽霊と見えるものは憂うつ病者の幻覚か、悪者のたくらみによって起される錯覚にすぎないというのであった。しかし、当時の幽霊もしくは精霊に関する信仰がいかに根強いものであったかは、Reginald Scott の *Discoveries of Witch-craft* が禁書であり、エリザベス一世の次のジェームズ一世が王位につくに至って、この書が焼き捨てられたことから知られる。

ともかく、いったんは亡霊の言葉を信じ復讐の決意をみなぎらせ、ハムレットは父の仇討を唯一の目的として行動することを誓うが、やがて理性が心にめざめ、見たものがはたして父王の亡霊であり、その言葉が真実であるのかをためす必要が生じた。父親を殺した容疑者を犯人にするために必要な証拠をクローディアスがさらけ出さずにはいられないようなわなを準備した。それがいわゆる劇中劇の場面 ‘mousetrap scene’ である。ハムレットが仕掛けたわなは見事に成功し、クローディアスは彼の心の秘密をハムレットにさらけ出すが、それと同時にハムレットもまたクローディアスに対して自己の正体をまぎれもなくさらけ出すことになる。こうして開幕冒頭の “Who’s there?” という言葉で開始されたハムレット劇は、劇中劇の途中で、クローディアスが “Give me some light: away!” (III. ii. 272.) 「明りを持って来い、さあ、あちらへ!」と叫んであわただしく席を立つ ‘discovery’ の瞬間を境として謎の霧の中での心理的な戦いから、霧のはれ上った白日の下での肉体的な戦いの段階へと進んで行く。こうして自殺の瀬戸際までハムレットを追いこんだ人間への絶望感と母親の不義の再婚によって自分もまた汚れたという自己に対する嘔吐感に押しつぶされそうになりながらも、彼の世界をむしばむ悪と攻撃的に戦う姿勢をハムレットは取って行く。ロミオは運命に挑戦しているが結果としては依然運命に動かされているのに対して、ハムレットは運命に対決している。

ハムレットが叔父の罪を確定づけるとともに一つの大きな障害が取りのけら

れたのであるが、より根本的な問題がまだ残されている。それはハムレットが自己の行動に神のこころを意識することによって自己の主体性を確立することであった。このことは劇中劇の場続く第三幕第三場でクロードィアスが自己の罪を悔いて、ひざまずいて祈っている場面で明らかである。この時ハムレットは仇討を決行しようとするれば容易にできたはずである。この場面は心理的眞実を描くためではなくて、神の正義を行う人間の無能力を劇的に強調していると考えられる。

Now might I do it pat, now he is praying ;
And now I'll do 't; and so he goes to heaven ;
And so am I reveng'd. That would be scann'd :
A villain kills my father ; and for that,
I, his sole son, do this same villain send
To heaven.
Why, this is hire and salary, not revenge.
He took my father grossly, full of bread,
With all his crimes broad blown, as flush as May ;
And how his audit stands who knows save heaven ?
But in our circumstance and course of thought
'Tis heavy with him. And am I then reveng'd,
To take him in the purging of his soul,
When he is fit and season'd for his passage ?
No.

(III. iii. 73—87.)

「今こそ絶好のときだろう、彼は今お祈りをしている。今こそやっつけよう——そうすれば彼は天国へ行く。そういうことに復讐はなってしまう。これは考えなくてはならん。悪者が父上を殺し、そしてそのために一人息子の

この俺が、その悪者を天国へ送りこむことになる。ふむ、これでは金を出して頼まれた賃仕事で、復讐にはならん。父上は現世の欲にまみれて、一切の罪業が五月の花のように咲き誇っている時に、突然殺されたのだ。だから天の裁きはどうなるか、神でなくてはわからないが、しかしわれわれ人間がいろいろ考えをめぐらしてみたところでは、軽くすむわけがない。が、あの男が自分の魂をきよめて、永遠の旅路につく備えができていた時、その命を取るのが復讐になるであろうか？ とんでもないこと！』

ここで行動に出れば可能である復讐をどうして遷延したかについては、この戯曲の直接の種本となった Thomas Kyd (1558—94) の作品 *Ur-Hamlet* の流血の主題をシェイクスピアが敬遠したのだという説（たとえば、Levin Schücking, *The Meaning of Hamlet*, pp. 137—8.; Hardin Craig, *An Interpretation of Shakespeare*, p. 189. など）、また、病的なほどに優柔不断なハムレットの観念主義によるものであるという説（たとえば、A. C. Bradley, *Shakespearean Tragedy*, p. 134; E. M. W. Tillyard, *Shakespeare's Problem Plays*, pp. 146—9. など）もあるが、この場は自然すなわち秩序を覆滅した世の悪とのたたかいという人間ハムレットの深刻な問題を通じて、ひとりの人間の成長を描き出すというこの戯曲全体の主題を考えた場合、クローディアスの肉体と同時に彼の魂までも破滅させることが出来るまで彼を殺さないというハムレットの言葉は、神の調和ある秩序にあっては、クローディアスの受ける罰は‘damnation’でなければならない、しかもハムレットにはその‘damnation’を下す資格がまだないのだというように考えたい。

この場に続く母親の寝室の場面で自分の母親が父王殺害には何の関係もなかったことをハムレットは知るが、同時に自分自身の感情の激発によってポローニウスを殺害してしまう。

For this same lord,

I do repent: but heaven hath pleas'd it so,

To punish me with this, and this with me,
That I must be their scourge and minister.
I will bestow him, and will answer well
The death I gave him.

(III. iv. 172—177.)

「この老人にはかわいそうなことをしましたが、これも天の配剤。神はハムレットを使ってこの男を罰し、またこの男によってハムレットを罰して、わたしは神のふるう鞭になるように、しむけられたのです。死体はかたづけしておきましょう。この男を殺した責めは負うつもりです」

死んだポローニアスにハムレットが見る神の処罰は、クローディアスに対するハムレットの意図をあらわしているのではなく、むしろ、ハムレット自身の死が近づいていることをあらわしている。関係のない無実の人間を殺害する者は、同じように死ななければならないというのが、エリザベス朝時代の人びとの道徳律であった。この瞬間からハムレットの死は観客にもハムレット自身にも動かしがたい確定となる。

{IV}

第一幕第二場ではじめて登場するハムレットは、その僅か一行だけの短いせりふでよく描き出されている。クローディアスがふたたび遊学の途に出かけるレアティーズにむかって別れの言葉をあたえ、かたわらにいるハムレットに、

But now, my cousin Hamlet, and my son,—

(I. ii. 64.)

「さて、わたしの近親のハムレットよ、そしてわたしの息子よ……」

と親しく話しかけているのに対して、

A little more than kin, and less than kind.

(I. ii. 65.)

「ただの親戚でもないが、肉親あつかいはまっぴらだ」

とすなおに応じないで、傍白でこたえるというような、うちとけない、暗くてにがい、冷たくて皮肉な人間として登場する。一方、叔父のクローディアスは戯曲の進行とともに次第にその正体を暴露して残忍な悪人となっていくことをわれわれは知っているが、はじめてハムレット劇を見る観客の眼には親切で慈悲深い国王、義理の息子にいたく気をつかっている人間として映るであろう。ハムレットは「天に対しては不遜のきわみ」*'a will most incorrect to heaven (I. ii. 95.)*といわれるほど父親の死を悲しんでおり、この場でハムレットが叔父の国王や、母である王妃に答える言葉（ハムレットは決して自分から話しかけない）は、暗い皮肉にみち、あげ足とりで、冷たく、とりつくしまもないようにそっけない。「信仰うすき心の持主、わがままだ、わからずやだ、といわれてもしかたのない」人間であったハムレット、神によって造られ、神によって区別された自然に大きな転落感を抱いて茫然自失したハムレットが、第五幕では自己と神との関連のなかに生きる意義を見出し、神の調和をみだす不正と墮落を正す高貴な人間としてわれわれの前にあらわれる。父王がなくなったためにウィッテンベルクの大学からエルシノアに帰って来たハムレットは 18 才ぐらいのはずであるが、シェイクスピアは第五幕第一場で観客にわざわざハムレットが 30 才ぐらいであることを知らせている。ハムレット劇の主題が人間の *life-journey* であることを考えれば、ハムレットが神の調和ある秩序——自然を正す資格のある人間に成長したことを観客に知らせる必要があったのであろう。シェイクスピアの時のあつかいは、矛盾のない自然主義によって支配されているのではなく、かれの主題の要求に従って自由であったと

言えよう。死が避けられないことであるのを知ることが、神のころへの信仰と結びつかなくてはならない。そして、そのことによって人間は生死を超越できるものである。この信仰をハムレットは英国への航海で身につける。この英国への航海こそハムレット再生の *principal mark* と言えよう。ハムレットはこの航海で神意によらなければとうてい可能とは思われない、なかば奇蹟的な事件によって、英国でかれを待っている死からまぬがれるのである。エルシノアに帰ったハムレットはホレイショに向かって言う。

Rashly,——

And prais'd be rashness for it, let us know,
Our indiscretion sometimes serves us well
When our deep plots do pall; and that should teach us
There's a divinity that shapes our ends,
Rough-hew them how we will.

(V. ii. 6—11.)

「……むこう見ずも、こうなれば立派なものだ。無分別も時には役に立つ。考えに考えたくわだても水泡に帰するものだからな。結局、最後の仕上げは神がする。つくづくそう思う。荒削りはいくら人間がしてもだ」

神は小さな人間の理性などを超えたところにおいて、その摂理は人間によって窺い知ることはできないのだというハムレットの悟りの言葉と見なされるものである。第五幕でわれわれが接するハムレットは復讐を神の手にゆだね、神の使徒としての自分に目ざめた寛大な人間に成長している。そしてクロードィアスを死に追いやることは *private vengeance* としてではなく、神の正義を行う *public duty* として見ている。

Does it not, thinks't thee, stand me now upon——

He that hath kill'd my king and whor'd my mother,
Popp'd in between the election and my hopes,
Thrown out his angle for my proper life,
And with such cozenage—is 't not perfect conscience
To quit him with this arm? and is 't not to be damn'd
To let this canker of our nature come
In further evil?

(V. ii. 63—70.)

「どうだね君、ぼくの今の立場としては——父王を殺し、母を汚し、王冠を横どりして希望を奪い、この命までもあやうくわなに引掛けようとし、しかもあんな奸策を用いたやつ——あいつをこの腕で片付けるのは、ちっともやましくないじゃないか？　そしてこの自然の害虫になおこの上の危害をほしいままにさせるのは、天罰のほども恐しいじゃないか？」

しかしハムレットにはクローディアスを殺害する特別な計画があるわけではなく、ただ神のころへの信仰があるだけである。親友ホレイショがレアーズとの試合を前にして、ハムレットの死を予感して試合を延期するようにすすめるが、神への信仰に生きるハムレットは静かに語っている。

Not a whit, we defy augury; there's a special providence in the fall
of a sparrow. If it be now, 'tis not to come; if it be not to come, it
will be now; if it be not now, yet it will come: the readiness is all.
Since no man has aught of what he leaves, what is't to leave betimes?
Let be.

(V. ii. 219—224.)

「それにはおよばない。前兆などというものを気にかける手はない。一羽

の雀が落ちるのも神の摂理。来るべきものは、いま来なくとも、いつかかならず来る。いつか来るのでなければ、いま来る。いま来るのでなくても、いつかは来る。覚悟がすべてだ。いつ死んだらいいか、そんなことは誰にもわかりはしないのだから、問題にはしないよ」

彼の人間観を、したがって彼の自然観を大きく転換することを余儀なくした全宇宙、全自然の強い転落感の後に、新しく誠識された現実に向かって立つ逞ましさと、神に対する愛——それはまた、真実に対する愛であるが——とが併存しているハムレットをわれわれはここに見ることが出来る。この世は神に見放されているのではない。神の摂理は一羽のすずめにもまで及んでいる（『マタイ伝』10.29.）。この言葉はまた、叔父を殺して父親の仇を討つという、キリスト教の教義に反する復讐をハムレット劇の題材に選んだ作者シェイクスピアの paradox を解明するものであると思われる。「愛する者たちよ、自分で復讐をしないで、むしろ神の怒りにまかせなさい。なぜなら、主が言われる。『復讐はわたしのすることである。わたし自身が報復する』と書いてあるからである」（『ローマ書』12.19.）。

レアーティーズとの仕合を前にして、ハムレットは心からレアーティーズの許しを乞う。そこにはかつての狂気 (antic disposition) はまったく影をひそめ、人間として許しを乞うハムレットの言葉は誠実にあふれ、神の和解をうけたものの寛容な姿がある。

Give me your pardon, sir; I've done you wrong;

But pardon 't, as you are a gentleman.

This presence knows,

And you must needs have heard, how I am punish'd

With sore distraction. What I have done,

That might your nature, honour and exception

Roughly awake, I here proclaim was madness.

Was 't Hamlet wrong'd Laertes? Never Hamlet:
If Hamlet from himself be ta'en away,
And when he's not himself does wrong Laertes,
Then Hamlet does it not; Hamlet denies it.
Who does it then? His madness. If 't be so,
Hamlet is of the faction that is wrong'd;
His madness is poor Hamlet's enemy.
Sir, in this audience,
Let my disclaiming from a purpos'd evil
Free me so far in your most generous thoughts,
That I have shot mine arrow o'er the house,
And hurt my brother.

(V. ii. 226—244.)

「許してくれ、レアーティーズ。ハムレットが悪かった。だが、その立派な人格らしく許してくれ給え。ここにいる人たちも知っているし、君もきっと聞いているだろうと思うが、ぼくはひどい精神錯乱におかされているのだ。自分のした事はさだめし君には人の子の気持として耐えがたい、侮辱的な、けしからん事に思われただろうが、それもこれも狂気のためであったとここで断言する。ハムレットがレアーティーズに不法な事をしたのか？断じてそうじゃない。もしハムレットがおのれを失い、自分が自分でない時にレアーティーズに不法をはたらいたとすれば、それはハムレットの仕業とは言えない。ハムレットはそれを否定する。それなら、何者の仕業か？ハムレットの狂気の仕業だ。そうなれば、ハムレットも被害者の側の人間だ。彼の狂気はあわれなハムレットの敵だ。レアーティーズ、こうしてみんなの前で、ぼくは決して故意に罪を犯したのではないことを声明し、うっかり屋根越しに放った矢が、偶然に自分の兄弟を傷つけてしまったと同様に、世にも寛容な心の君のゆるしを得たいと思うのだ」

神の摂理によってクローディアスはみずからしかけたわなでみずから滅びさり、ガートルードは死によって不義の罪から救われる。シェイクスピアはレアーティーズの言葉を通して、神の調和ある秩序にあっては、悪はみずから破滅するのだと言っている。

He is justly serv'd;

It is a poison temper'd by himself.

(V. ii. 327—328.)

「それも王の自業自得。みずから調合した毒薬なのだ」

神のところにすべてをゆだねたハムレットは、その死において勝利と救いをかち得る。ホレイショはハムレットが救いを得たことをはっきり語っている。

Good-night, sweet prince,

And flights of angels sing thee to thy rest!

(V. ii. 359—360.)

「おやすみなさい、ハムレットさま。むらがる天使の歌声にさそわれて憩いの床に」

ハムレットの戯曲も『ロメオとジュリエット』同様、勝利と救いの物語であり、決して敗北の物語ではない。

シェイクスピアがかかげた鏡には、人間を含めた自然が——というよりは人間そのものと言った方がよいが——さまざまな像をえがいて映し出された。彼の人間理解はいろいろの曲折をたどるが、『ハムレット』以後の人間把握とその描写は、在来の世界観や人間観に対して懐疑を表明したりするところもある

が、本質的には在来の世界観をそのまま受容したものであった。その中心をなすものはトレミーの天文学に基いた整然たるヒエラルキーを根幹とする中世的秩序観で、人間は獣類から截然と区別され、天使に隣接するものであり、その性は善であるとする考え方であった。しかし『ハムレット』において作者シェイクスピアは人間の中にひそむ悪の現実の姿に真正面からとり組んでいると言える。神から遠ざかり、獣類の中に転落した人間の現実の姿——在来の生存の哲学を根底から揺り動かした人間への幻滅と絶望、楽天的な美しい栄光の夢は消え去り、強い転落感が戯曲『ハムレット』にはある。ハムレットはそのためにもはや生きることには耐えられない自己相剋の状態に追いやられ、自己が自己たり得る主体性を失い、自殺という自己中心的な誘惑のなかで、生存の最後の瀬戸際を彷徨する。そのハムレットが生というものがもはや自分自身のためのものではないという新しく認識された現実にかくましく立ち、神なき精神風土としての現実、「何かが腐っている」、「この世の関節が外れている」デンマークの腐敗と不正をただす資格のある人間に成長する、いわばある青春の日の人間の *life-journey* をシェイクスピアは『ハムレット』という作品にドラマティックに表現したのである。そして、そこにはまた、人間への強い絶望感と否定感のあとに神との関連における人間の再生があり、神に対面しているハムレットの姿がある。「覚悟がすべてだ」とハムレットは言った。その神の使徒としての自己の使命に目ざめたときハムレットは非業の死を遂げる。そしてその使命の達成は、ハムレットにとっては、この世の権勢、富、王冠、恋愛、自分の肉の命よりも大切であった。しかし同時にこのことは、戯曲『ハムレット』においてシェイクスピアの人間観とその表現が一つの危機に立ったとも言えるのである。これは一つには時代の影響であった。つまり人間とは何であるか、人間によっては捕捉できない神意との関連のなかに人間生存の原理を見出すしかないとしたら、人間が人間たる主体性を確立できるであろうかという疑問であった。もちろん、人間は神から神の理性と均質である理性をいくらかにせよ分ち与えられており、その理性によって宇宙の合理的な秩序——すなわち神の摂理に参与でき、かつ参与すべきものであるという思想は重要である。しかし、

どこかにいる神の中にあつて人間の世界は確実に存在するのだという人間中心の奔放な人間解放精神もまた、脈々としてすでに興っていた。表面的にはまだ強い中世的自然観、宇宙観という潮流が強く流れていても、底流としてはすでにルネッサンスという新しい人間中心の世界観、人間観が解放精神として躍動しはじめており、それまでの中世的秩序観念が疑われ始めており、同時に、現実の姿としての人間にも注意が向けられ、神のイメージである人間のなかに潜む悪の発見は、在来の生存の哲学をその根底から揺り動かすものであった。このような思想の根本的な転換期にあつてシェイクスピアの文学も、偉大な文学が常にそうであるように、その時代の制約を受けると同時に時代を超越するというパラドックスを持つものであった。戯曲『ハムレット』には一方には消え去らんとする栄光の夢への愛惜と、また一方には、夢からさめて現実に全面的に立ち向かおうとする作者の人間描写の一つの必然的展開が認められると言えよう。『ハムレット』以後シェイクスピアは『マクベス』において自然そのもののなかに魔女を含んでいるという、もはや中世的自然法をもってしては説明のつかない世界を描き出し、さらに、『リア王』において中世的自然法に最大の疑問を投げかけ、その整然たる体系を否定し、ふたたび新たに自然を——人間を見直そうと試みている。

参 考 文 献

本稿を書くに当って引用または参照させていただいた文献を記して感謝の意を表します。

大山俊一：『シェイクスピア人間観研究』（篠崎書林）

富原芳彰：『シェイクスピア試論』（研究社）

『続・シェイクスピア試論』（研究社）

Battenhouse, R. W. : *Shakespearean Tragedy, Its Art and Christian Premises* (Indiana U. P. 1969)

Craig, H. : *An Interpretation of Shakespeare* (New York, 1948)

The Enchanted Glass (Oxford, 1952)

Harbage, A. : *Conceptions of Shakespeare* (Harvard U. P. 1966)

Hawkes, T. : *Shakespeare and the Reason* (London, 1964)

Muir, K. : *Shakespeare's Sources I* (London, 1961)

Parker, M. D. H. : *The Slave of Life* (London, 1955)

Ribner, I. : *Patterns in Shakespearean Tragedy* (London, 1960)

West, R. H. : *Shakespeare and the Outer Mystery* (Kentucky U. P. 1968)

Wilson, J. D. : *What Happens in Hamlet* (Cambridge, 1935)